

日本ナショナリズムの歴史

全4巻 《特価》予約受付中
2017年8月末日まで

「神話史観」にもとづく日本「神国」ナショナリズムは、アジア太平洋戦争での敗戦とともに消滅したはずだった。だが戦後72年をかけ、日本ナショナリズムはよみがえり、今や政界の主流を占め、「憲法改正」までが日程に上る。

どうして、こうなってしまったのか——?!

日本ナショナリズムの源流から、その形成、確立、崩壊、そして復活まで——を通して叙述した

初めての著作!

- ◆ 本書は例えばこんな「問いかけ」に答える形で叙述されています
- ◆ 日本ナショナリズムの源流は、どこに求められるのか?
- ◆ 天皇制は、日本ナショナリズムと、どんな関わりがあるのか?
- ◆ その天皇制は「武家の時代」七百年をどう生きぬいてきたのか?
- ◆ 幕末、政治的に無力だった天皇制が、どんなプロセスを経て復権できたのか?
- ◆ 大久保利通や木戸孝允ら維新の主役たちはなぜ「神権天皇制」を欲したのか?
- ◆ 自由民権運動は、ナショナリズムをどうとらえていたか?
- ◆ 日本「軍国主義」はいつ、どのようにして生まれ、妖怪化していったのか?
- ◆ 「超国家主義」の教育は、どんな人間像をつくり出していったか?
- ◆ 敗戦により「神格」を否定し「人間」となった天皇を、民衆はどう迎えたか?
- ◆ 今日に至る「日の丸」「君が代」問題は、いつ、どのように始まったのか?

著者 **梅田正己** ジャーナリスト
歴史研究者

■ 四六判・並製・360×400頁
■ 定価Ⅱ(全巻均一)3,024円(税込)



全4巻合計12,096円(税込)のところ
全巻ご予約・ご送金をいただいた方にかぎり、
10,000円
税込・送料当方負担
にて、ご提供いたします。

■ 刊行予定
I・II巻 2017年9月初旬
III・IV巻 2017年10月
2巻ずつ刊行後にお送りします。

私がなぜ、
「日本ナショナリズムの歴史」に
とりこんだのか

梅田正己

一九四五年の敗戦の年、私は国民学校(小学校)4年生でした。教育勅語を暗誦させられた最後の世代です。一学期、やっと暗記できたと思ったら、夏休みに8.15を迎え、以後は一度も暗誦させられずに終わりました。ナショナリズムは、したがって私には過去の遺物で終わっていました。

それが今日の問題として立ち現われてきたのは、私が出版社に入り、高校生対象の月刊誌の編集を担当するようになってからです。一九六五年、文部大臣の諮問機関・中教審は高校生世代に向けて「期待される人間像」中間草案を発表しました。その中にこんな言葉があったのです。

「われわれは日本の象徴として国旗をもち、国歌を歌い、また天皇を敬愛してきた。…われわれは祖国日本を敬愛することが、天皇を敬愛することと一つであることを深く考えるべきである」

戦前日本の青少年にとって最高の命題は「忠君愛国」でした。表現はソフトになっていますが、指示している方向は同じです。

この翌々年「神話史観」にもとづく戦前の紀元節が「建国記念の日」として復活しました。

その後、月刊誌が会社の方針で廃刊とされたため、七二年、仲間と共に出版社・高文研(当初の社名は高校生文化研究会)を設立、「月刊・考える高校生」(後に「月刊ジュ・パンス」と改題)を創刊しました。市販の条件はなかったため創刊時のマニフェスト「生徒と教師を主権者とする高校教育の創造をめざす」に共鳴した全国の先生たちの、同誌的熱意に支えられての出発でした。

月刊誌の刊行とあわせて教育書を中心に人文書の単行本の刊行も開始し、以後、低空飛行ながら出版活動を続けることができました。

文部省による国家統制の強風で教育現場が波立ってきたのは、八〇年代の半ばからでした。主題は日の丸・君が代の問題です。その掲揚・斉唱の完全実施に向けて、文部省は徐々に圧力を強め、九九年二月には広島県立高校長の自殺という痛ましい事件を生みます。そして、あろうことか、政府はこの事件を「奇貨」として同年八月、「国旗・国歌法」を成立させたのです。

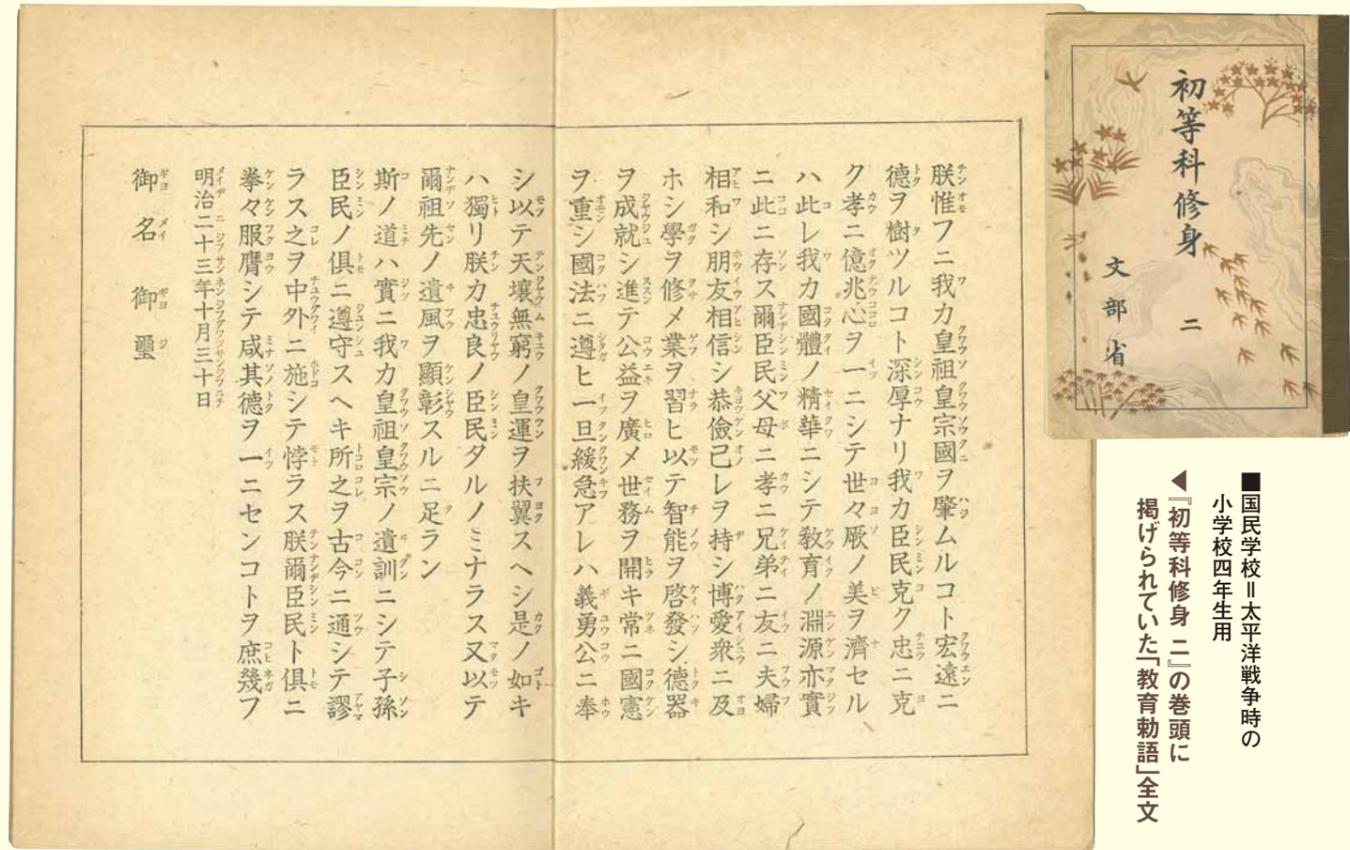
こうした中、教育現場からは次第に自由な空気が失われ、息苦しくなってきました。それと共に、先生たちの自主性、みに依拠していた私たちの月刊誌もその基盤を突き崩されてゆき、二〇〇六年、ついに三四年の経歴を閉じたのでした。あわせて同年、戦後文部行政の「総仕上げ」として、教育基本法の「改正」が強行されたのです。

「教育勅語」に象徴されるように、戦前日本において国家主義の形成・確立の主舞台とされたのは学校教育でした。戦後日本においてもその復活の主戦場となったのはやはり学校教育の現場でした。その現場をずっと見続けてきた書籍編集者として、私が国家主義の問題を引きずってきたのは考えてみれば当然かも知れません。

大日本帝国の崩壊とともに滅び去ったはずの日本ナショナリズムが、戦後七〇年をかけてよみがえってきた、このしたたかな生命力の源泉はどこにあるのか、それを解明するにはその発生の地点からとどいてみる必要があるのではないか。

そう考えて、現役引退後、私はそれにとりくんだのでした。日本ナショナリズムの解明は、同時にこの国の政治のあり方を根底から再検討する手がかりを、きつと与えてくれるはずだ。

梅田正己(うめだ まさき) 一九三六年生れ。書籍編集者。高文研前代表。著書「これだけは知っておきたい・近代日本の戦争」「非戦の国」が崩れゆく「市民の時代」の教育を求めて(以上、高文研)、「この国のゆくえ」(岩波ジュニア新書)など。



国民学校II太平洋戦争時の
小学校四年生用
「初等科修身」の巻頭に
掲げられていた「教育勅語」全文